を無視した，1969年（昭和44年）金沢における日本精神神経学会以降の精神科界の激動は，結局，精神科医療の根本的改革につながらなかった．この教訓をわすれてはなるまい．

（平成28年1月例会）

時衆・遊行聖における病

新村　拓

人は「病の器」といわれ，「病ならで死ぬるは百千の中に，まれに一人二人」と本居宣長は述べているが，前近代の人びとの間では長病がもたらす不都合を慮って「頓死往生」「ほくり往生」を願う気持ちが強かった．仏家では病を四苦のひとつと位置づける一方で，「病即菩提」「病は善知識」「悟ることまさに病にあるべし」などと説き，両義的な捉え方をしていた．

鎌倉期の禅僧虎関師錬は『病儀論』において，病の本体は煩悩にあり，不摂生や寒暖の不順は煩悩を発動させる外的要因にすぎない．煩悩の発動によって心身一如の生命体はリズムを乱し発病に至るのである．縁起により成り立っている万物は，それぞれが独立した実体というものではなく，関係性の中で常に変動しているものである．すべてのものを空と体得することができるならば，病は消失すると説いている．

陳・隋代の天台大師が著した『摩訶止観』では，煩悩がもたらす病に心を集中させ，病の真相の観察（止観）を通して悟りに至らせる修行階梯を体系化させているが，同時にインドの伝承医学（アーユルヴェーダ）・中国の伝統医学（体治家の説）・道教の養生術を援用した苦痛緩和と治療に関する具体的な処方箋も提示している．いわゆる仏教医学といわれるものの治方は，僧が学ばなければならないとされていた五明のひとつ医方明，あるいは『大正新修大蔵経』収載の仏教医学諸経典などをみるかぎりでは実に多彩なものであった．

平安末期以降，実践的な医療を担う僧医が出現するとともに，造寺造仏・修法・悔過・経典読誦・写経などの行為を通して，治病・息災・延命・増益の現世利益をめざす祈療も盛んに行われ，仏家の治病とのかかわりは深まっていく．中世の仏家が祈療と医療の関係についてどのように考えていたのか，たいへん興味のあるところであるが，この件については紙数の制約もあるので拙著『日本仏教の医療史』に譲ることにして，一遍（1239–89）およびその後の時衆，近世の時宗教団における祈療と医療についてのみふれることにする．

一遍の伝記絵巻には『一遍聖絵』（1299年）と『遊行上人縁起絵巻』（1307年以前）があるが，前者の病にかかわる4つの場面からうかがえることは病を仏罰と捉え，また不信心・煩悩が病を招くとし，信心のみが病を癒し，医薬とのかかわりについて忌避する姿勢である．『一遍上人語録』からは愛欲の思いを断ち切るために身体を蔑視し，死ぬことを歎かず，病むことも嫌わず，老い衰えていくことも悩まず，力も望まず，また臨終に特別な意味を認めず，名号を唱えることの中において既に浄土の現出を見ている一遍の姿が浮かび上がる．

病の器である身体への執着を忌避した一遍にとって祈療・医療は無意味なものとなったが，一遍寂滅後，時衆の間に祈療・医療を積極的に受けるだけでなく，施す側に立つ者も多く出るようになった．他阿真教（遊行上人2世）は『他阿上人法語』において，命の惜しさから医師・陰陽師を招き祈療・医療に走ることを批判しており，また室町前期の解阿弥は『防非鈔』において「時衆の身を以て医師を立て，呪術を行なふを停止すべき」とし，時衆の徒が何らの医書も読まず，安直

に医療を行い，人を殺し，女性に近づき，報酬をむさぼっていることを戒めている．遊行を止めた時衆が渡世のために売薬・鍼治・堕胎に従事しており，また南北朝から室町末にかけての軍記物などには，臨済宗・南都（法相／華厳）・時宗の陣僧が「金創を療治し（洗浄・縫合・止血・気付薬・服薬），死骸を治め，最期の十念を授け，無聊を慰め」る活躍もみられた．

近世初期，遊行を止め教団を形成した時宗は僧の健康管理に大きな関心を寄せ，そのため積極的に医薬を利用するようになる（清規『東西作用抄』）．また幕府の寺院法度にもとづいて僧に対する生活規制が強まり，寺請（檀家）制度によって僧の生活が安定化すると，医療に従事する僧はみられなくなる．寺では祈療を盛んに行い，生き仏である遊行上人による回国では，賦算（南無阿弥陀仏の名号を記した札を配る）・治病のための加持祈祷・御守りの配布がなされるようになった（『藤沢山日鑑』）．

（平成28年4月例会）

新刊『米沢藩医　堀内家文書――解題篇・図版篇――』から何が読みとれるか

片桐　一男

Ⅰ　堀内文書との出会い

昭和44（1969）年10月28日（火）

午後，順天堂大学小川研究室で堀内淳一氏より杉田玄白はか関係文書を見る．

翌29日（水）酒井シヅ氏と堀内文書の調査・整理を開始（目録作成作業開始）．

同12月16日（火）

午後，小川研究室で堀内家の軸物を見る．

昭和45（1970）年1月29日

「江戸時代後半の蘭方医術の発展についての研究」開始，メンバーは小川鼎三，大鳥蘭三郎・大塚恭男・堀内淳一・酒井シヅ・片桐一男．

同3月11日（水）より調査研究会（文書解読会）開始．

同3月23日（月）『日本経済新聞』に「ベールを脱いだ蘭学社会」の紹介記事掲載される．

1971年，1972年の2ヶ年，上記研究班は文部省科学研究費の支給を受けた．

・研究成果は次の通り．

「特集堀内家文書の研究」（『日本医史学雑誌』第18巻第1号1972年3月）所収．

小川鼎三「堀内文書にみる蘭学者の生活と思想――第一回杉田玄白の手紙から――」

大鳥蘭三郎「堀内文書にみられるオランダ語について」

堀内淳一「米沢藩々医，堀内家とその周辺」

大塚恭男「堀内文書よりみた江戸時代後期の医療（第一報）」

酒井シヅ「堀内文書関係年譜」

・堀内文書解読の成果は次の通り．

片桐一男「堀内文書目録稿」（『日本医史学雑誌』第16巻第3号1970年9月）

片桐一男「堀内文書の研究1–11」（『日本医史学雑誌』第16巻第4号～第23巻第4号　1970年12月～1977年10月）堀内文書の約半数を解読掲載．

Ⅱ　米沢市医師会との契約

堀内淳一医博が堀内家文書の全体を米沢市に寄贈されたことをうけて，米沢市医師会は残る約半数の文書の解読・注記・解説による公刊事業を計画され，筆者に委託された．平成23年7月1日付で「資料解読業務委託契約書」に調印．

納入期限は平成26年2月末日であったが，平成25年12月26日付で完稿納入．

編集は米沢市立上杉博物館と共同で進行．平成